

## いやはやまったく立山登山

岩井 淑

8/1

新宿の暑さが嘘のようである。夜行ツアーバスに揺られてボーッとした頭でも車窓にたたきつく雨の音は強烈に聞こえる。この雨音が夢の中の物語であって欲しいと思いながらもバスは室堂バスターミナルへ到着した。全くのガスのなかである。どの方向になにがあるのやら全く見当もつかない。しかたないのでとりあえず立山ホテルの食堂に入り、朝食を摂りながら日程を考えることにする。

梅雨明け10日は絶好調のはずなのだが、こちら富山県立山地域はまだ梅雨が空けておらず雨は20日間も降り続けていると言う。出るのは「あーあ」というため息ばかりである。それにしても関東地方のあの暑さはなんだ!と叫ばずにはいられない。

食事中にすばやく今日の行動予定を変更し、とりあえず「みくりが池温泉」へ行き、温泉に入りながら天候の回復を待つことにする。

バスターミナルから徒歩15分程で温泉に着き、500円の入湯料を払って「いい湯だな」の人となり、後はおきまりのコースで喫茶室に入り「おーい、生ビール」となる。ビールは旨いのだが、気は晴れない。11時からは場所を食堂に移してウイスキーでの酒盛りとなる。いつものパターンだ。食堂のテレビ画面は抜けるような青空の下での静岡国体の開会式を中継している。ああ、太平洋側の天気がうらめしい。

今日の前定であった立山縦走は大幅に変更してしまったが、別山乗越の剣御前小舎まで登り、明日の天候具合いで行動予定を立てることにし13時に雷鳥沢から登り始める。8月1日だというのにまだ雪渓上では学生がはでではウエアでスキー合宿の練習に汗を流している。雨は小降りになったり止んだりの繰り返してであり、立山三山の影すら見えない。

1時間30分も登ったろうか、突然ガスの中から避難小屋のようなのが現れたと思ったら、その左側に剣御前小舎があるではないか。あっけない登りであった。天候が晴れていて明日は必ず剣岳への登頂が約束されるのであれば、迷う事なく剣沢を下って剣山荘へと歩を進めるのだが、ものすごいガスと風である。この天候の荒れ具合から判断し剣御前小舎での宿泊に決定する。そうと決まれば酒盛りの再々スタートである。まだ15時前だ。

8/2

晴れてくれという願いも空しく天候は昨日よりも荒れ、経験上からいって稜線上の風はもっともっと強いに違いない。かくなる上はキッパリと諦めて下山あるのみである。山は消えはしない。また時間を調整してやってくればいいさ、と結論し昨日登ってきた道を雷鳥沢へと下山し「雷鳥沢ヒュッテ」へとザックを下ろす。まだ朝の9時である。しかし、この雨の中を我々だけではなく結構多くの登山者や観光客が歩いているのである。ま、気分を変えて温泉にでも浸かろうか。

のんびりと温泉を味わった後は例によりビールでの酒盛りである。『立山縦走・剣岳登山』は『室堂散策・温泉巡り』へと大変貌を遂げるわけである。天候を恨んでみても始まらないし、「ま・こんなこともあるさ」の軽い乗りで遊ぶしかない。たかが山登りなのだ

から。

昼食後、雨も上がったので重い腰を上げ地獄谷を廻っての室堂一帯の散策へと出かける。酒盛りばっかやっていたのでは体に悪い。散策中には雄の雷鳥にも出会った。高山植物も可憐な花を咲かせている。歩いて良かったと思う。たまには山に登れずに温泉に浸かったりの散策でもいいじゃあないか。

8/3

立山は今日も雨だった。どこかで聴いたフレーズだなあ。

11時30分に室堂を発車した越後観光バスは途中、立山駅、宇奈月温泉などでツアー客を乗せた後、北陸自動車道から関越自動車道へと乗入れ一路新宿センタービル前へと走り続ける筈であった。あくまでもその筈であった。しかし、乗客の誰一人として想像もしなかった事態が高速走行中に発生したのである。いま考えると全く無事でいられたのが不思議な感じであるが、走っているバスの右側後輪が2つ共に外れてしまい、1つはバスを追越し左側のガードロープを乗り越え田圃の中へ落ちこち、もう片方は後ろへ外れたのだ。

その時、私は酒が足りないなあなどと思いながらうつらうつらしていると、ガタガタガタという音と共に次第に振動が激しくなったと思ってまもなく、ガクーンという形でバス全体が右に傾きガガガガーという音と共にバスは止まった。ほんの10秒位の時間に感じられた。最初はパンクか?と思った。まさかダブルタイヤの両方が外れてしまうなど絶対に夢想だにしない事態だ。いやはやなんとも。それにしても運転手は冷静だった。ブレーキを使わずにシフトダウンだけで車道の左側路肩に寄せ停車させ、すぐに三角マークの故障車表示を出し、乗客の気を鎮めるために熱い紅茶をついでまわった。そして事故状況の説明をする。一方、交代乗務員は田圃の畦道を通って近くの工場の電話から本社へ代替車の手配をする。乗客は怪我人が発生しているわけではないので、比較的冷静であった。

乗客は言う。「火花がバチバチ出ていた」「外れたタイヤがものすごい速さで走っていた」「最初から変な音がしていたんだよなあ」「運転手に言ったんだよなあ、あの音は何だって」「トンネルの中でなくて良かったなあ」「後ろの車が巻き込まれなくてよかったよ」などなど……

結局、代替車が到着するまでの2時間は手持ちぶたさで、あーあ、酒買ってくればよかったであった。ほんと。

1991. 8. 10. 記